
今日も今日とて戦闘員。

KF

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日も今日とて戦鬪員。

【Nコード】

N8295A

【作者名】

K F

【あらすじ】

あ、どうも。常田です。常田政次。悪の組織、通称「ファンシーテイル」の戦鬪員やってます。どうぞよろしく。【14話のつぶやき「メキヤ、……………」と。僕の右腕から音が聞こえたのは気のせいでしょうか】ノ1話辺りは短いので、お気軽にお読みください。

あ、どうも。常田です。常田政次。

悪の組織、通称「ファンシー テイル」の戦闘員やっています。

去年の冬からやってるんでそろそろ戦闘員始めて半年くらいになります。

今日はオフなので、僕が所属している戦闘隊の隊長兼クラスメイ
トの神功楓さんとお出かけです。荷物持ちをデートと称していいか
分かりません。でも嬉しいからいいや。

楓さんは可愛いです。といっても、生徒会長やったり委員長や
つてたり団長やったりとかはないです。美人で生徒会長つてファ
ンタジーですよね……。実際。彼女は、悪の組織の戦闘隊長やつて
る以外はごく普通の高校生です。ついでに僕も。彼女との出会いは
話すと長くなるのでまた次の機会と言うことで。

「ごつめーん、遅れちゃった」

あ、楓さんが来ました。うわあ、キュート。女の子のお洒落つて
いいですよ。見てて和みます。最高です。でも口に出して彼女を
褒めるようなことはしません。真顔で女性を褒めることができるの
はジゴロだけです。あとナンパ師。僕はどちらでもないんで恥ずか
しくて言えません。だから笑顔で彼女に挨拶します。

「こんにちは、楓さん」

ビー！ ビー！ ビー！

腕時計の3回アラーム。これはファンシー テイルの呼び出し音
です。

せつかく今から楓さんと楽しいひと時を過ごすはずだったのに。
……。死ねばいいのに。ムカつきます。超イラつきます。確かにファ
ンシー テイルは掛け替えの無い大切な場所だけど、時と場合によ
ります。っていうか、マジウゼえ。

あ、でも嫌な顔はしません。だって、隣で楓さんが超輝いた目し

てるんですから。

「わぁ、出撃だ！ 燃えるわねー。行くわよ、政次くん！！」と
か言ってます。こうなった彼女を止めることはできません。素直に
出撃するしかなさそうです。

でもいきなり手を引っ張って走り出すのは止めて欲しいなあ。嬉
しいんだけど手首が痛いんで。あ、ちなみに楓さんの握力は両方と
も50kg超。リング片手で潰せます。

「1」(後書き)

評価・メッセージ随時受付中。

「2」(前書き)

常田政次：僕です。悪の組織の戦闘員やってる以外は普通の高校生だと思っています。昨日、楓さんと手を繋ぎました。嬉しかったです。超嬉しかったです。

「2」

「いつけー、アタシの鉄鋼騎士団！！ 蹴散らせえー！」

爆音が響きます。でも音と光だけの似非爆弾なので一般市民に害はありません。あと鉄鋼騎士団って言うてるけど、本当はぼた餅に6本足が生えただけのロボットです。騎士団なんて格好いいものじやありません。

あ、挨拶が遅れました。常田です。

呼び出しがかかったんで、ただいま出撃の真っ最中です。

今回の作戦コードは「BCK」。ビューティフルシティー彼方の略だそうです。作戦内容はというと、ロボットたちの爆発音でポイ捨てをしている人たちを脅かし、残りの戦闘員でゴミを拾って街をキレイにすること。僕は英語の成績がイマイチなので分かりかねませんが、微妙に間違ってる臭いのは気のせいでしょうか……？

悪の組織、通称「ファンシー テイル」の戦闘員になってからもう半年。未だにこの組織の目的が分かりません。っていうか、本当に組織なのかも不明です。さっきは「残りの戦闘員で」とか言いましたけど、ロボット以外の戦闘員は僕くらいしかいません。後は隊長の楓さんくらいが有機生命体です。

あ、この際なんで組織についてちょっと説明しますね。

ファンシー テイル。正式名称『鬼ヶ島』の構成員は僕を合わせて六名。

頭領は神功柳さん。察しのいい人なら気付いたでしょうが、神功楓さんのお爺さんです。もう八十を超える高齢ですが、全然そんな風には見えません。頭領の時は貫禄たっぷり、オフの時は孫思いの好々爺。僕もよくしてもらってます。ちなみに、僕は柳さんに組織に入らないかと誘われました。日給（一回の出撃で）一万円が決め手でした。

柳さんの下に三幹部がいます。

一人目は鶴来一也さん。つるぎいちや、と読むそうです。まだ二十代前半くらいで、肉弾戦のエキスパート。一也さんに刀を持たせたら敵う者はいないと思います。普段はどこかの会社に勤めているとか。

二人目は八乙女花音さん。やおとめかのん、と読むそうです。偽名だと思えます。自称、年齢不詳のマッドサイエンティスト。タレ乳メガネの紫髪って呼んでも良いと思います。あ、嘘です、だからお願い許して……。性格はアレな人ですけど、彼女がいなくてこの組織は成り立ちません。その最大の理由がロボットです。圧倒的に人手不足のこの組織がなぜ維持できてるかというと、彼女の作るロボットの活躍によるところが大きいというわけです。

三人目は真壁巖さん。まかべいわお、と読むそうです。読めると思うけど一応流れで。柳さんの元部下だそうです。絶対帝国軍です。普段はムツとした顔してるけど、意外といい人です。表の顔はどこかの会社の社長だか副社長だか。柳さんには返しきれない借りがある、って以前酔っていたときに呟いてました。あれは漢の顔でした。天に寄りて不義を討つ。

そして戦闘隊長の神功楓さんと戦闘員の僕こと常田政次の計六名。けっこう仲良くやっています。

あ、ところで何で「鬼ヶ島」が「ファンシー テイル」になったかと言うと、初出撃の時に楓さんがそう名乗ったからだそうです。

「悪の組織『ファンシー テイル』の力を思い知れー！」

そうそう、こんな感じで。わざわざ手書きのテロップまで持ったらしいです。勢いって凄いですね。

あ、こっちにもゴミ落ちてる。やっぱり筹持ってくればよかったかなあ。

「2」(後書き)

続きました。評価・メッセージ随時受付中。

「3」（前書き）

神功楓：戦闘隊長です。自称「立てば爆薬、座ればモダン、歩く姿は槍の様」。たぶん間違えて覚えただだと思います。可愛いんですが、ちょっと馬鹿です。でもそこがまた可愛いんですよ。

どうも、常田です。

今日は書類整理のお仕事。といっても花音さん謹製のロボットが手伝ってくれてるのでかなり楽です。運搬などは要求通りにやってくれるので、僕は書類に目を通して分別するだけだったりします。

しかし、量が多いなあ。普段からマメに整理しておけばこんな苦労も無いんですが、まあ、今そんなことを愚痴っても始まりません。さっさと仕事を片付けよう。

一枚目。「戦闘報告書：『い』の一番」。あ、これはロボットの戦闘報告書ですね。何百体もいるのにそれぞれが戦闘報告書を出すので書類が溜まって仕方がありません。そういえば、今さらですがロボットってこんなに高性能なものでしたっけ？

深くは考えないことにします。花音さんのことだからどうせ非法の何かやってるんだろうし。

あ、ちなみにロボットは今のところ「い」の一番から「い」の千二百五十三番までいます。正直、この名前の付け方はどうかと思います。せめて百単位で「ろ」「や」「は」に変えてやれよ、タレ乳メガネ。

スパーン！

いきなり「い」の二百九十四番にハリセンで叩かれました。絶対花音さんの仕業です。たぶん僕の思考は花音さんに筒抜けになっていると思います。人権侵害です。あ、痛い痛い痛い。ちよつ、やめていゃ、ああ……。

すみません。ちよつとだけ襲われる側の気持ちがありました。なんていうか、もうどうなってもいいから早く終ってほしい、って

感じ？

こうなったら人間としてもう駄目ですね。立ち直る気が起きません。

それは兎も角、良く見たら整理してる書類の8割は戦闘報告書でした。楽です。超楽です。ロボットに渡したら後は勝手に順番に並べてくれます。

さて、残りの書類に取り掛かりますか。

……囲碁の、棋譜ですね。誰のでしょう。柳さんか巖さんの可能性が高いです。対抗馬が鶴来さん。たぶん個人的なものでしょう。書類に混ざってしまったんですね。後でどちらかに渡しておきますよう。

次は……マフィンの、レシピ、ですか。

なんででしょう、とてもやるせないです。なんで悪の組織の資料室にこんなものがあるんでしょうか。楓さんですね、はい。自問自答って素晴らしい。

あ、ようやくまともな書類を見つけました。これは僕が書いた戦闘報告書ですね。微妙な字の歪さが人間らしいと思います。嘘つきました。単に字が下手なだけです。

これは確かスカートめくり大作戦の時の報告書ですね。思い出すだけで吐き気がします。街中はジーンズやスラックスで溢れててスカートが一人もいなかったため被害0。僕は何もしてないのに、なぜかこの後三日間ほど楓さんは会話してくれませんでした。思い出しただけでムカつきます。超ムカつきます。何がムカつくって、これだけ僕が被害を被っていないながら、一体何のための作戦だったのか。がひたすら謎ってことです。

ああ、楓さん。あの時は本当に泣きそうでした。今でも泣けてきます。っていうか泣きます。マフィン、作ってもらおうかな。

たぶんしょっぱい味になると思います。それもご愛嬌ということ。

「3」(後書き)

更に続きました。評価・メッセージ随時受付中。

「4」（前書き）

神功柳・楓さんのお祖父さんにしてファンシー テイルの創始者です。好々爺です。日給一万円払ってくれます。嬉しいです。超嬉しいです。

暑中見舞いもうしあげます。皆さん、いかがお過ごしでしょうか。常田です。

今日は記念すべき日です。二つの意味で。

半年前の今日、僕はファンシー テイルに入りました。これが一つ目の理由です。そして、今日は彼が組織に帰ってくる日でもあります。それが二つ目。

彼との再会を心待ちにしているのは僕だけじゃありません。僕の隣には楓さんが座っていて、彼の帰還を待っています。

と、ドアが開いて花音さんが出てきました。

「よ、お待っとさん」

楓さんが目を輝かせます。

「それじゃあ！」

「ああ、ようやく修理完了だ。出てきな、『い』の五番」

花音さんの指パツチンに合わせてドアの向こうから駆動音が聞こえてきます。こんな場面に水をさすのもアレですが、いまさら指パツチンは古いんじゃないでしょうか、花音さん。

「古くない古くない」

やっぱり僕の頭蓋骨の中には何か埋め込まれるみたいです。それが超科学かなんかで僕の思考を花音さんに伝えているんだと思います。前にも言ったけど人権侵害です。科学の前に憲法精神を学んでください。あ、やっぱり止めてください。曲解したうえ悪用しそうです。

それはさておき、ゆつくりした動きが「い」の五番が出てきました。半年前の姿のままです。感動です。超感動です。花音さんってやっぱり凄いなあ。

「久しぶり〜。元気だった、五番？」

楓さんが「い」の五番に話しかけます。「い」シリーズは会話する機能がついていないので五番が返事することはありませんが、前足の一本を上上げて挨拶を返しました。喋れなくってもコミュニケーションは取れるのです。ちなみに今のは「よう、嬢ちゃん。手前の方こそ元気やったか」って言ってました。

五番と楓さんがしばらくじゃれた後、僕は五番の前に立ちました。途端、場の空気が変わります。本当に変わるわけじゃないのでそんな感じがただけです。

言いたいことは山ほどあるけど、何を言ったらいいのか分からず、僕はしばらくの間黙りこくっていました。

謝罪？

いや、それは少し違っ気があります。だからといって現状報告するのも変ですし、楓さんのように親しい挨拶を交わすような間柄でもありません。

数分悩んだ末、僕はいよいよと心を決めて口を開こうとしました。

その時です。「い」の五番は先ほどと同じように前足の一本を上げて僕の言葉を遮りました。あ、今さらですが「い」シリーズはぼた餅に足を6本付けたようなロボットです。

僕はすぐに彼の言いたいことが判りました。だから、黙ったまま右手を前に出し、握りこぶしから親指を天に向かって立てます。花音さんが「お前こそ古いよ！」って言うてるけどこの際無視します。

「い」の五番はそのまま後ろを振り返って部屋の中に歩いていきました。今の彼は背中であんなに話してました。漢です。ちなみに今は「はっ、少しは男の顔になったじゃねーか、チキン野郎。手前が俺様にしたことは忘れることはできねえ。ならお前はこれからどうすりゃいいの。……もう分かってるよな。へっ、嬢ちゃんのお守りから解放されてせいせいするぜ。十年間だけ、十年間。ちっせえおてんば娘ならいざ知らず、こんなに大きくなっちまったら俺様じゃ

もう面倒見切れねえよ。チキン野郎……、いや常田の坊主。嬢ちゃんを……頼むぜ」って言うてました。

彼との因縁は話すと長くなるんですが、ぶっちゃけ詳しく説明するのが面倒くさいんで端折ると、僕が五号を蹴り壊したあと楓さんを助けたら柳さんにスカウトされたっていう話です。端折りすぎです。全然意味が分からないと思います。僕も分かりません。

まあ、半年経ってようやく五号も戻ってきました。ファンシーテイルも完全復活です。そろそろまともな活動しましょうよ、本当に。

「実は修理自体は2時間で終ったんだけどね」

花音さんがズボラで怠け者で科学者として以前に人としてダメダメだ、ってというのは周知の事実ですから別に突っ込みませんよ？

「4」(後書き)

またまた続きました。 評価・メッセージ随時受付中。

「5」(前書き)

八乙女花音：ファンシー テイルの科学者です。花音さんがいないと組織は成り立たない、ってくらい大事な人なのに、その才能以外全て役立たずです。何でこんな人に才能があるんでしょう。謎です。超謎です。

よく誤解されるんですが、ファンシー　テイルはこれでも悪の組織です。当然、悪逆非道な行いをしたことも一度や二度じゃありません。

公共施設を破壊したり、工場を襲ってロボットの材料を奪ったり、街中で暴れてみたり。どんな意味があるのか分かりませんが、とりあえず色んなことをしています。良心が痛まないのか、と一度言われたことがあります。そう言われてもただの　戦闘員である僕は上の命令に従うだけなので、別に良心が痛んでも関係がありません。

よく仲間内からはドライな奴、他人からは冷血漢と言われますが、心外です。超心外です。僕だって心が痛むことはあるし、嫌な事もたくさんあります。

それじゃなんで戦闘員として前線に出てるんだと聞かれたら、楓さんのチラリズムを楽しむためだけです、としか答えられません。

前置きが長くなりました。常田です。

戦闘員やって何が一番嫌かって、この全身スーツです。黒いです。ベルトと靴と手袋だけは白です。そしてなぜか覆面。花音さんの発明品らしく、着心地は悪くありません。覆面つけても視界はクリアで、内臓スピーカーとかついてたりします。意外に豪華です。無駄に豪華とも言います。

まあ、着心地の話はどうでもいいんです。問題は見た目です。なんていうか、全てにおいて痛い。見て痛い、着て痛い、見られて痛い。三拍子揃っております。正直、出撃前はいつも涙が出ます。

一度だけ柳さんに改善要求を出したのですが、これだけはポリシ―なので変えられないと言われました。そう言われてしまっはも

う何も言えません。なにせ、組織名がファンシー　テイルになっても文句一つ言わなかったんです。そんな人が変えられないと言うんですからよほどの理由があるんでしょう。

そんなわけで今日も泣く泣くこのスーツを着ます。

服を脱いでスーツに足を入れます。上半身と下半身が繋がってるので、首のそこから足を入れないといけないのがまた泣けます。せめて上下首で分かれてくれれば……。それが決め台詞唱えてポーズとればいつの間にか装着してる、とかだったら耐えられるんですけどね。

「そんな青少年の願いを叶えて上げようじゃないか！」

また今日も元気に盗聴ですか？

何度も言いますが人権侵害です。ムカつきます。超ムカつきます。つていうか、それ以前に、ここ男子更衣室ですから！

ほら、鶴来さんも驚いて……。あれ、いない。花音さんの気配を感じ取って逃げたみたいです。あの人、要領よすぎです。あやかりたい。

「さあ、このピアスをつけて。そして叫ぶのよ！　『チーンジ、ドキ　ドキ、ファンシー！！』」

花音さん、今まで憚っていましたが今日こそ言います。消えてください。もう一度言います。消えてください。再三言います。消えてください！

あ、八割くらい本気ですから。

「5」(後書き)

しぶとく続けました。評価・メッセージ随時受付中。

「6」（前書き）

鶴来一也：凄腕の剣士さんです。道具に頼らないその腕前は名刀なまくらを選ばず、と言えば聞こえはいいんですが、実際はどの刀使っても必ず折ってしまうんで刀に興味がないっただけです。勿体無いです。超勿体無いです。

今日はファンシー テイルの定例会議。会議室にはいつもの面子が揃っています。

頭領、柳さん。剣士、鶴来さん。科学者、花音さん。ご意見番、巖さん。隊長、楓さん。そして、会議の時だけ書記官。常田です。

ファンシー テイルの定例会議はちよつと特殊です。まず、柳さんの思いつきで会議を行うので不定期。この時点でもう定例会議じゃありません。

まあ、特殊なのはそういう点ばかりじゃありません。例えば、意見や批判などは階級に関係なく言うことができます。端的に言えば、僕が頭領のやつてることを批判することもできるわけです。みんなの仲が良いからこそできる、少数精鋭の利点ですね。

ただし、一つだけ守らなければいけないルールがあります。それは、誰かが喋ってるときは最後まで黙って聞くこと。

組織に入って初めての会議の時でした。聞き取れない単語があったのでつい「すいません、もう一度お願いします」って言ったところ、突然床が抜けて椅子ごと奈落の底に落とされました。3日後に回収されました。その落とし穴を作ったのは花音さんらしく、花音さんが僕に謝ってくれたのは後にも先にもこの時だけでした。曰く、死んだ魚の目をしてた。見てて居たたまれなくなつた、とか。

ファンシー テイルのやることはどれも極端すぎて困ります。超困ります。

「さて、次の議題じゃ。先日花音くんが発明した『変身ピアス』を戦闘隊に本採用してくれ、と申告しているんじゃないか。はて、どうしようかの？」

司会役の柳さんが皆に尋ねました。ここが某国会なら即座にブーイングが起きたと思います。だけど落とし穴の怖さを知っている僕

は何も言えません。にたにた笑ってる花音さんの顔が非常に癪に障ります。ムカつきます。超ムカつきます。タレ乳薄命って言葉があればいいのに……。

と、ここで鶴来さんが手を上げました。テーブルの前にあるランプが光ります。これは発言権があるという印です。

「俺は良いと思うよ。着替えの手間が省けるし、『チェンジ、ブレード・ワン』っていう決め台詞も格好良かったから」

花音さんの野郎、鶴来さんの好みに合わせやがったな。やばいです。超やばいです。たぶん花音さんは他の人のもその人の好みに合わせていると思います。そしたらなし崩し的に採用が決まって「チェンジ、ドキ、ドキ、ファンシー！」とか叫ばなきゃいけないってしてしまう。

「わしは反対だな」

いつの間にか発言権が巖さんに移っていました。

「その、なんだ。若いもんには良いのかもしれんが、この年になって変身グッズというのは……」

嬉しい援軍です。巖さん、そのまま押し切ってください。

「ふむ、確かにそう言われると。ちと恥ずかしいものがあるのう」

ほら、柳さんも食いついてきました。さ、もつと「変身グッズは如何に老人に合わないか」を説いてください。声には出せないで心の中で応援しています。

「えー、可愛いからいいじゃん」

「うむ、可愛いからいいな。ほんじゃ採用決定」

椅子から思い切り転げ落ちました。ええ、それはもう力の限り。

わ、忘れていました。柳さんは基本的に楓さんに甘かったんだ。

常田、一生の不覚です。巖さんは柳さんの決定したことに逆らわないし……、終った。

「6」(後書き)

まだ続きました。評価・メッセージ随時受付中。

「7」（前書き）

眞壁巖：組織のご意見番、巖さんです。元帝国軍人で柳さんの部下
だったらしく、柳さんに忠誠を誓っているみたいです。組織内で一
番まともな人です。尊敬します。超尊敬します。

「チエーンジ、ドキ、ドキ、ファンシーー!!」

「あつはつはつは! に、似合ってるよ、政次くん!!」

悪の戦闘員、常田です。今の決め台詞を聞いて僕が悪の戦闘員と分かる人は一体何人いるのでしょうか。お昼の某有名番組でアンケート取ったら商品ももらえるくらいの確率だと思います。

自分の力じゃどうにもならないことってありますよね。理不尽。

不条理。運命。それには色々な名前が付けられていますが、今回花音さんがしたことは何て言うか知ってますか？

ハラスメントですよ、こん畜生。

『嫌がらせされる男の子って可愛いー』

わあ、わざわざ内臓スピーカー使ってまで可愛いって言われました。嬉しいです。超嬉し……はっ!?

あ、危ないです。夏の暑さにくわえて怒涛の嫌がらせ。二重苦を前に精神防御がゼロに近いです。本当に誰か助けて下さい。すみません、やっぱり助けは入りません。こういう時こそ僕の男としての真価が試されるのです。ああ、でもマジでヤバイ。たぶんドツボに嵌るってこういう状態の事を言うんでしょうね。

「ありや、本当に辛そうだけど大丈夫かな？ 政次くん」

復活です。超復活です。まさか楓さんの額コツツンをこの身で受けることが出来る日が来ようとは。額コツツンっていうのは、風邪引いた時に額と額をくっつけて温度を測るアレです。

スーツ越しなのが残念ですが、もう今ので気合十分です。一人で戦隊ヒーローだって倒してみせます。いや、斃してみせます。

『あ、それじゃよろしくね』

……は？

「GET SET READY?」

『GO、FIGHT！！』

うわぁ。何か変身始まってます。効果音とかバックグラウンドミュージックとかが流れてます。

最低です。超最低です。何が最低かって、まだちゃんと登場すらしていないのに出オチしてるって所がです。

「7」(後書き)

不思議な事に続きました。評価・メッセージ随時受付中。

「8」（前書き）

「い」シリーズ：花音さんが作ったロボットです。その数、実に1253体。一体づつ違う性格をしているんですが、その違いを見分けるのは困難です。超困難です。

「一つ、人の生血を啜り！」

「二つ、不埒な悪行三昧！」

「三つ、醜い浮世の鬼を！」

「四つ、世直しその為に！」

「五つ、逸した心を正し！」

『退治してくれよう、グレンジャー！！』

常田です。突如現れた戦隊ヒーローを前に、突っ込み所が多すぎて茫然自失中です。

まず、変身する時は英語なのに、なんで決め台詞は桃太郎侍をパクっているんですか。効果音はともかくバツクグラウンドミュージックは一体どこから流れているんですか。グレンジャーって、紅蓮レンジャーの略称なんですか、それとも愚かなレンジャーなんですか。

それ以前に。

誰ですか、お前ら！

いつもハイテンションな楓さんも、いきなりの事態に呆然としています。いや、あれはボケーっとしているって言った方が合ってるかな。たぶん「何だろう、この人たち」って考えて知恵熱を出しかけたから頭をフリーズさせてる状態なんだと思います。可愛いなあ。「悪の組織、『ファンシー テイル』。これ以上お前らの好きにはさせないぞ！」

赤い人が何か叫んでいます。今まで敵らしい敵っていなかったからなあ。どうします、花音さん？

『とりあえず相手の要求を聞いてみましょう。戦うのはその後でも遅くはないわ』

了解しました。そういえば、思考が花音さんに盗聴されてること

に違和感がなくなってきました。これは精神を守るために防衛機能が働いているんでしょうか、それとも防衛機能が麻痺してしまったから慣れてるだけなんでしょうか。

ひとまず、それは横に置いときましょう。いま考えるべきことは目の前の相手とどうコミュニケーションを取るかです。

とりあえず、楓さんに相手の要求を聞くよう進言しますか。

「楓さん、楓さん？」

「ふあ、はい！ 何でしょう政次くん！」

頭をフリーズさせたまま眠ってたみたいです。改めて、可愛いなあ。

『はいはい、それは分かったから。さっさと相手の要求聞きなさいさって』

僕としては楓さんとグダグダしながら一緒にいられるだけでいいんですけどね。

「楓さん、花音さんがとりあえず相手の要求を聞いてみるって言ってます。たぶんあつちのリーダーはあの赤い人です」

「わかりました。赤い人ー、あなた達の要求はなんですかー？」

「俺たちの願いはこの街の平和！ そのために悪逆非道な振る舞いで街を跋扈するお前たちを成敗する！」

おお、即答した。グダグダな僕たちと違って、あつちは確固たる目的があるみたいですね。

「ねえ、政次くん」

楓さんが今までにない真剣な顔で僕を見つめてきました。もしかして、ようやく敵に対して警戒心が沸いたのででしょうか。それとも今の答えで「敵と戦う事」を選んだんでしょうか。

安心してください。僕はあなたがどんな選択をしても着いていきますから。

その決意を示すために、僕も真剣な顔で答えます。

「何ですか、楓さん」

「ばっこ、って何？」

楓さん、あなたにシリアスクラッシュャーのあだ名を付けてもいい
ですか？

「8」(後書き)

当然続きました。評価・メッセージ随時受付中。

「9」（前書き）

グレンジャー：突如現れた戦隊ヒーローです。全身スーツの五人組
って、記号化されすぎですよ。赤い人がグレンレッドって名乗って
いたんでたぶん紅蓮レンジャーの略だと思えます。でも愚かなレン
ジャーの方が似合ってます。超似合ってます。

「さあ、いつでもかかって来い。俺たちは逃げも隠れもしない！」
 さつきから赤い人だけが喋ってるんですが、他の四人がポーズを決めたまま全然動きません。今日は気温も高いし、僕と同じように全身スーツを着ているヒーローの人たちは大丈夫でしょうか。

正直、熱中症で倒れて欲しいと思う外道、常田です。

いいんです、外道でも。別に仏教徒でもないですし。

さて、現状を整理してみましよう。頭のおかしい台詞を叫んで変身したら、突如戦隊ヒーローが現れて、シリアスなムードになるも楓さんが台無しにした、と。

どこの人外魔境ですか、ここは。

ともかく、一番の問題はやっぱり戦隊ヒーローをどうするかですね。戦うにしても、今はロボットも五、六体くらいしか連れてきてません。相手が一般人なら問題ないんですが、戦隊ヒーローを相手にするには少し心許無いです。

ならばどうするか。

……現実的な対処といたら、やはり話し合いでしょう。都合のいい事に、グレンジャーとやらはこっちが手を出すまで受け身状態みたいですし。

と、言う訳で僕が交渉してみますね。花音さん。

『了解。楓ちゃん、ひとまず下がって、交渉は常田くん任せなさい』

「ばっこ、ばっこ……？ ばっこ、ばっこ、ばっこ……」

跋扈跋扈と呟きながら楓さんが下がります。正確に行くならば、楓さんに乗せた楓さん専用の移動用ロボット「い」の十二号が下がりました。楓さんは何も聞こえてなさそうです。だから、普段から電子辞書を持ってください、って言ってるのに……。

「えーっと、赤い人？」

「グレンレッドだ！」

テンション高いうえに反応早いです。こういうタイプは話が早くて好きなんですよね。

「え、あんたつてぐだぐだが好きなんじゃなかったの？」

それは楓さん限定です。他の奴なんか糞食らえです。特にタレ乳メガネなんか相手だと最悪です。

「んなっ……………」

通信機能をオフにしてやりました。これでお局さんの小言を聞かなくてすみます。ああ、怒れる花音さんの顔が見える。ザマミロです。超ザマミロです。

「グレンレッドさん、僕たちは今のところあなた方と戦闘する意思はありません」

「なにっ！？　つまり、これまでの非道を反省し組織を解散してくれるという意味か！」

「違いますよ馬鹿野郎」

こういう奴には直接言うのが一番です。馬鹿って、言わないと気が付かない癖に、言われたら言われたでキれるから嫌なんですよね。

「ならばもう話し合う事は無いな。覚悟しろ、ファンシー　テイル！」

それはつまり「問答無用、やっちまいなー！」って意味ですよね？

はあ、できれば穏便に済ませたかったのに。世の中、そんな都合のいい事はかりじゃ無いってことですね。仕方ありません。そのことを彼らにも、身を持って知ってもらうことにしましょう。

「はあああ、たあ！！」

赤い人もといグレンレッドが殴りかかってきました。迷いの無い拳です。悪に対してとはいえ、人に向って拳を揮うことに恐れがない。なかなかの使い手と見ました。

まあ。

容赦がないという点では僕も負けませんけどね。

「えい」

馬鹿の調理法。

その一、一直線に突っ込んで来たので足を掛けて転ばせます。

「ぬっ!? くはっ!」

その二、踏みつけます。

「痛っ!」

その三、踏みます。

「痛っ、痛っ!」

その四、踏みます。

「痛い痛い痛い! おのれ、足をどける!」

その五、力の限り踏み続けます。

「痛い痛い痛い止める止めて、頼む止めてくれ、おい聞いているのかあ!」

やられてても威厳があるというのはある意味凄いことなんじゃないでしょうか?

まあ、このくらいで止めといてあげますか。仲間もいるんですし、後は大丈夫でしょう。

「敵勢力の一名を無力化。彼を囷にして撤退します」

「恐れをなして逃げるか卑怯者! ぬうう、貴様の事は忘れん!

忘れはせんぞあ!」

先に撤退している楓さん、正確に言うならば「い」の十二号を追いかけて僕も走り出します。それにしても、喋れば喋るほど面白い人だなあ、赤い人。

しかし。敵がでてきた以上、今までのように出撃することはできなくなりましたね。

毎回意図は不明な作戦ですが、柳さんも何か考えがあつての作戦なんでしょう。柳さんの邪魔をする奴は……許せないですね。もし出撃回数が減ったら、誰が日給1万円を払ってくれんだよ。

「……………ばっこ?」

そしてまだ考えていたんですか、楓さん!?

「9」（後書き）

やっぱり続きました。評価・メッセージ随時受付中。

「10」(前書き)

名前の読み方：そういうえばよく聞かれるんですよ、「名前何て読むの?」って。僕がときたせいじ。楓さんがじんぐうかえで、です。普通、一回聞いたら分かると思うんですけどね。謎です。超謎です。

「いよーつす、トキダ！」

「常田です。ト、キ、タ」

今日は高校の登校日です。夏休みも後半に差し掛かってきたので、緩んだ気持ちを引き締め、新学期に休みボケを残させないための行事らしいです。

だったら休み明けの前日に登校させるよと思うかもしれませんが、ところがどっこい。高校生っていうのは不思議なもので、前日に登校させようとしたらサボる癖に十日ほど前に登校日を設けたら文句を言いながらも登校するのです。

「にしても、登校日なんてかつたるいよなー。まー、これ終わったら残りの休み中は遊び放題だからいつか！」

ああ、無情。どっちにしる休める期間は変わっていないのに、見事なまでに学校の策略に嵌ってますね。

あ、忘れてました。僕と一緒に歩いている彼は荒竹昌良。高校に入ってからできた友達で、登校ルートが一緒なので付き合いは短いながら仲の良い友達の人です。

短髪、筋肉質、単細胞と三拍子揃った体育会系の身体つきをしています。とある理由で高校からは帰宅部になったそうです。予想としては入学早々更衣室の覗きでもやらかして、学校側から部活禁止令されているに一万円。

「そついやさ、常田！」

「何ですか、昌良」

ちなみに、僕が敬称をつけないで名前を呼ぶのは同級生の男子のみです。厳密に言えば、プラス馬鹿。

「実は俺、正義の味方始めたんだ！」

「お前かつ、グレンレッド!!!」

し。

しまった！

馬鹿プラスチックヒーロー、イコールグレンレッドって図式が反射的に閃いたせいで思わず声に出してしまいました。

ヤバイです。超ヤバイです。全身スーツを着てたとはいえ、僕の正体がバレる可能性が高いです。

「常田、お前……」

ほら、怪しげな目付きで見られています。どうしましょう。手っ取り早く、蹴って殴って壊して埋めようかな。ああ、それがいいですね。それでは早速。ふふふ、はははははは。

「もしかして、あの時現場にいたのか！　いやー、周りには誰もいないと思ってただけけど、見る奴は見てるんだな！」

あれ……、なんだか変ですね。もしかして、もしかすると。

「それにしても、気付かれちゃーしょうがないな。隠していたがバレちゃしょうがねえ、俺がグレンジャーのグレンレッドだ！　へっ、惚れんなよ」

奇跡的に気付かれてないみたいですね。っていうか、正体隠してるんなら街中で叫ぶな。それ以前に、僕に正体明かすなよ！

僕の正体はばれていないみたいなので、とりあえず一安心です。

ですが、これからの対処に困るのは事実です。もしグレンジャーと戦うことになった時、さすがに友達と判ってる相手を倒すのには抵抗がありますしねえ。

え、この前踏み潰したことについてはどうでもいいのか、って？

それはそれ、これはこれ。というか、正直どうでもいいです。

「そつだ！　お前も近くで見てたってことは、ファンシー　テイルの方も見てたのか！？」

突然凄い勢いで昌良が尋ねてきました。はて、僕の正体には気づいていないみたいだけど、なんの意図があつて僕にそんな事を聞くんでしょうか。

「い、一応見たけど。それがどうかしたんですか？」

「あのロボットに乗ってた女の子も見たよな!？」

楓さん、のことなんでしょうか？

「まあ、見ましたけど」

「あの娘、どこかで見たことないか？」
さ。

更にしまった!!

楓さんはただでさえ露出度の高いコスチュームを着ている上に、素顔をさらけ出しているんです。顔を隠しているものといえば、ちよっとしたアクセサリーくらいです。

馬鹿だと思つて油断してたけど、意外と冴えてるなあ。昌良に対して警戒を強めないと……。

だけど、今さら警戒を強めたところで楓さんの疑惑が無くなったわけじゃありません。できる限りはフオローしないと。

「き、き、気のせいなんじゃないですか？」

「いや、割と頻繁に。しかも近くで見ている気がするんだが」

「そそそ、そうかな？ きっと気のせいですよ。気のせいと思いましょう。気のせいなんです!」

駄目だ、動揺しまくって声が震えます。ピンチです。超ピンチです。

「あー。常田くーん、おっはよー!」

楓さん、許してください。初めて楓さんの笑顔に怒りを覚えてしまいました。あ、でも朝から楓さんの顔が見れて嬉しいなあ。もういつその事、このまま現実逃避したいくらいです。

「お、おおお! 君は!」

あー、やっぱり馬鹿でも気付きますよねえ。どうしましょう、本気で涙が出てきます。

「一目見たときから決めていた。好きだ、付き合ってくれ」
は？

「はあ」

『おおおおー!』

周りを歩いている人たちから歓声が上がりました。

あの、神様。僕の視界に写っている楓さん以外の人間をぶっ殺してもいいですか？

「10」(後書き)

なぜか続きました。評価・メッセージ随時受付中。

「11」(前書き)

荒竹昌良：僕の友達です。超高校級の運動神経と恵まれた身体を持ちながら帰宅部。故障した、先輩から目を付けられたなど、様々な憶測が飛び交っていますがその真相は未だに謎です。最近、正義の味方グレンレッドを始めたそうそうです。馬鹿です。超馬鹿です。

今日は楓さんとデートする日です。天気は晴れ、いつもは雑然とした街も今日は心なしかのんびりとしています。まさに絶好のデート日和。文句のつけようが無いですね。

僕こと常田政次と神功楓さんのデートだったならば、ですが。

先日、自分で正体を明かしたグレンレッドこと荒竹昌良がファンシー テイルの隊長神功楓さんに惚れたとか言って街中で告白。もちろん楓さんは断ったんですが、今度は昌良が「なら友達から始めよう。そして手始めに今度の日曜日にデートをしよう！」って言いました。

この時点で本来なら蹴殺決定です。

ですが、ここで楓さんが「それならいいよー」と破顔一笑。そうなった以上、僕に楓さんを止める権利はありません。僕に出来ることといえば、そう……昌良を消すことくらいでしょうか？

そんなわけでデートの待ち合わせ場所にやってきました。昌良。

その命、明日までであると思うなよ。ふふふ、はははははは。

「おっはよーございますっ！ 荒竹くん」

「おはよう、楓！」

よし、殺しましょうアイツ。

いきなり呼び捨てですか。出会った週の週末にデートですか。殺りたいです。超殺りたいです。思いで人が殺せるなら既に二百三十五回は奴を殺っていると思います。でも現実に思いで人は殺れません。ああ、つまりそれは。

「己の肉体を駆使し目標を駆逐せよ、という天啓なのかもしれませんね」

「いやいや、それは流石に妄想だろう」

「やー、でも俺的には面白いんで万事OK。むしろ手伝っぜ！」

二人のデートを尾行するには人手が足りなかったところ。手伝っ

てくれるとはありがたいですね。

「それではその長髪眼鏡のノツポは二人の足止め、そつちの金髪チビは量販店で刃物を手、しかる後に目標の男性を刺殺し警察へ出頭して下さい。犯行動機は『ムシヤクシヤしてやった。今は後悔している』で」

これで万事解決ですね。金髪チビが捕まってる間に僕は楓さんの心のアフターケアを担当しますか。

「OK、後は俺たちに任せってくれ！……って、そしたら俺たち捕まるじゃーん！ たっはー、なかなか黒いねアンタ」

「人生は長い。一度くらいは獄中暮らしを体験するのもいい経験になるかもしれんぞ」

「え、俺見捨てられてる？ 人生アウト？ 友達甲斐のない奴めっ、でもそんな所がスキっ！」

「ははは、僕もさ。マイルスイートダーリン」

ウザいなあ。キモいなあ。正直、今は昌良よりもこいつらを消したいです。超消したいです。

ところで、さっきから気になっていたんですが。

「誰ですか、あなた達」

「え、自己紹介まだだっけか。よし、聞いて驚け、見て騒げ！

金色の鬘摩かせて、今日も行く行く敵を討つ！ 巷を騒がす伊達男、その正体は……秘密だ！！」

「僕は彼方善一。こっちは向島真理。よろしくね、常田政次くん」

はて、なぜ僕の名前を知っているのでしょうか。僕とこの奇人変人コンビは初めて会うはずですが。

「ちよっ、そのキック待っ……んがっ！」

あ、無意識のうちに金髪チビの真理さんを蹴り倒してしまいました。まあいいや、ウザかったし。

とりあえず分からないことは聞いてみますか。

「善一さん、でしたか？ 以前にどこかでお会いしましたっけ」

善一さんは一度首を捻ってから、「あっ」と何かに気付きました。

僕の蹴りをまともに食らった真理さんが地面で悶えています。今は無視しましょう。

「てつきり昌良くんから聞いていると思ってたんですが、すみません。改めて自己紹介しましょう、グレングリーンの方善一と、グレンイエローの向島真理です。以後、お見知りおきを」

「……………昨日までの僕なら、ここで慌てふためいていたでしょうね。でも、もう驚きません。」

紅蓮戦隊グレンジャー。いや、紅蓮戦隊ってのは想像ですが。ともかく。グレンジャーははっきり言って正体を隠すつもりがないっぽい。昌良をレッドにしているくらいだしなあ。

「いやー、本当は秘密なんだぜ。でも昌良の馬鹿がお前に正体ばらしたって言うてたからさー。ほら、やっぱり秘密でも人に自慢したいじゃんー！」

この金髪チビは昌良と同じ匂いがします。

「だからバラしていい、と言うわけじゃないんですが……………まあ、本音を言うって『誰にも内緒』ってというのは精神ストレスが強いんですよね」

緑の善一さんは比較的……………、比較しなかったら十分変人なんです。が、比較的まともそう、という印象を受けます。

「そういう訳で、常田くん到我々の正体を明かしたというわけです。我儂なのは承知で言いますが、他の人には内緒にしててくださいね」

僕の正体がバレてるわけでもなさそうですし、とりあえず問題はなさそうですね。意図せずして敵の正体があったのもラッキーと思いますか。

さて、これで心置きなく昌良狩りができますね。腕が鳴ります。超腕が鳴ります。

「そーいやさ、セージって昌良のこと見張ってるんじゃないの？ 昌良も一緒にいた娘もとっくに行っちゃったけど」

回れ右をしてさっきまで楓さんと昌良がいた場所を眺めます。う

ん、いませんね。

さあ、こんなときこそ落ち着いて。深呼吸、深呼吸。

吸ってー、吐いて。

吸ってー、吐いて。

吸ってー吸ってー吸ってー、止めてー、気を練ってー、丹田から吐き出します。

「さっ、さ、と、言えー！ー！ー！」

「おお、あれこそ神速の正面蹴り、秘伝一葉貫き！！　まさか彼方流を使える者がここにもいたとは……」

「ぐふおっ……！　クール&ダーティーかと思ったたら意外と熱いのね、それじゃいつてきまあああー！ー！ー！ー！あああつす！！」

神・人・即・殺。

果てを越えて逝け、向島真理。

「11」(後書き)

ひそかに続けました。後5点でコメディ部門のランキング入りです。微妙に狙ってます。評価・メッセージ随時受付中。

「12」(前書き)

向島真理：同級生の男子です。その正体はグレンイエロー。ハーフらしく、地毛が金色です。彼方善一さんを「ハニー」と呼ぶ変人です。キモいです。超キモいです。

「や、やっと、見つけた」

酸素、酸素が欲しいです。空气中に21%しか含まれていないからって馬鹿にして済みません。あなたがいなかったら僕は生きていけません。いや、本当に。

だからお願いです。常田政次に酸素をください、空気様。

「あ、足早いんですね、常田くん」

「やつべー、熱っちー！心も身体もヒートアップだ、高鳴る 鼓動は恋の予感だ。そして俺は君の胸にフォーリンダウン！」

「あつ……ん、ダメだよ真理くん。常田くんが見てる」

「口ではそう言っても、身体は正直だね。ふふ、そんな君がスキっ！」

「ああ、マイスイーツトダーリン」

持久力をつけよう。42、195キロを全力疾走しても尽きないくらいの持久力を。そして、持久力がついた暁にはこの変態たちを蹴り殺そう。心にそう誓いました。

向島真理のせいで楓さんと昌良を見失った僕は街を風潰しに駆け回り、ようやく楓さんたちを発見しました。タイムは二時間十九分二秒。こんなに疲れたのはファンシー テイルに入る切っ掛けとなった事件以来かもしれません。

あ、ちなみに向島真理は僕の中で昌良と同列の扱いになりました。つまり同級生の男子プラス馬鹿ってことです。

はー、と息を吸って。ぜー、と息を吐く。はーっ、と息を吸って。はっ、と息を吐く。ふう、だいぶ呼吸が楽になってきました。呼吸法って大事ですね。鶴来さんに習ってて良かったです。

「さて、善一さんと真理。あなた達が何をしてても気にしないんですが、邪魔するなら帰ってください」

正直、本気で邪魔だからなあ。この男×男。

「そんなつれない事言うなよ。分かった。ちゃんと協力するから！」

「ま、大船に乗ったつもりでいてください。ちなみに、僕の座右の銘は『人の不幸は蜜の味』です」

使えるモノは何でも使うのがファンシー テイルの方針です。本人たちも乗り気のようにですし、使わせて貰おうじゃないですか。グレングリーンとグレイエローを。

「まず作戦を考えます。そのために情報が欲しいので、二人とも、自分の得手不得手を教えてください」

敵の情報を手に入れ、且つ、その敵を操って敵を討つ。なんか、久しぶりに悪の戦闘員っぽいですね。本当に、本当に……。長かつたなあ。

「はい、俺から言うぜ！」

まずはグレイエロー、真理ですね。

二人には見えないように腕時計のボタンを押します。忘れているかもしれませんが、この腕時計は花音さん作のファンシー テイル支給品。戦闘スーツと同じく無駄に高性能で、録音機能なんてものもついちやってるんです。

「俺は頭を使うより体を使う方が得意だな。あ、それとアクセシビリティに強い！ これでも、咄嗟の判断力と実行力は評価されてるんだぜ」

ふむ、能天気馬鹿かと思っていたら中々の自己評価ですね。こういうタイプは「俺は何でもできる！」っていうのが多いので、ちょっと意外でした。

「次は僕ですね。僕は幼い頃から家の道場で鍛えられていたので、ある程度武術の心得があります。頭を使うのも苦手ではないんですが……、実は一度戦闘になるとそっちに集中しちゃって、頭使うことができなくなっちゃうんですよ」

あはは、と善一さんは軽く笑いますが僕は笑えません。頭を使う

ことができる武術家。それはある意味、どちらかに特化した人物よりもやっかいです。その理由は多々ありますが、今は割愛しましょう。

二人の自己評価を聞いてしばし思索します。

……なるほど。グレンジャーも一筋縄ではいかないみたいですね。僕の正体が昌良にはなかったことを改めて喜んでおきますか。

あれ？

そういえば……。

「あの、つかぬ事を伺いますが」

「はいはい、何でしょう」

「昌良と一緒にいる彼女、誰だか知ってます？」

もちろん楓さんのことです。なぜこんな質問をするのか、それは推して知るべし、です。昌良が楓さんを初めて見たのはいつだったのか、とだけ言うっておきましょう。

「知ってるぜ。一年C組の神功楓ちゃんだろ。俺、世界史の授業で一緒だからよく見かけるよ」

「僕は昌良から聞いて知りました。同じ学校の一年生ですよね」

ふう。どうやらファンシー テイルの隊長つてことはバレてないみたいですね。昌良は確実に気付いてるはずですが、気にしてないのか、素で忘れてるのか。後者の確率が高いです。

さて、気付いてしまった以上ちゃんと突っ込まなきゃいけませんよね。三、二、一、ハイ。

「二人とも、僕と同じ学校だったんですか!？」

「おういえー！ その通りさ、マイブラザー。っていつか体育一緒にじゃん」

「あの……、この前の登校日。僕、壇上で話してましたよね。まさか見てなかったんですか？」

……。
はっ!？

い、いけない。現実の奇怪さやら気付かなかった事への自己嫌悪

やらで脳内の情報処理が止まってハングアップしてました。楓さんもこんな風に固まってたんですね、納得です。超納得です。

「って、そうだ。楓さん！」

慌てて振り返り楓さんを探します。……いた。良かった、今度は二人に気を取られて見失う、って失敗をしないで済みました。

楓さん、見失わなかったのはいいけど昌良と仲良くお喋りしている楓さんを見ていると悲しくなりますね……。

手を繋いで歩いたり、転びそうになった楓さんを昌良が抱きかかえたり、一つのカップにストローが二つだったり。あれ、変だな。涙が止まらないですよ？

あ、そっか。楓さん、笑ってるんだ。あんなに楽しそうに、あんなに嬉しそうに。昌良とデートして、それを喜んで……、僕も見たことないくらいとびきりの笑顔で笑ってるん、ですね。

……長いため息をつきましたよ。

はー！

賢しいって嫌ですね。本気だと思っていた恋にすら本気になれない。

僕はただ、楓さんにとっての一番を考えることしか出来ない。そして、楓さんにとっての一番は『好きな人』です。今まで一緒にいたんです、それくらい判ります。痛いほどに、判るんです。

だけど、心がこんなに痛いから。ちょっとだけ卑怯な言い訳をしてもいいですか？

『僕は一足先に成長したのさ、自分の幸せよりも彼女の幸せを優先できるくらいにね』、なんて……、卑怯な。言い訳。

「ねえねえ、ハニー。あれって」

「うん、間違いないね。マイルスイートダーリン」

アレだ。貴様等、実は自殺志願者ですか？

ならちようどいいですね、今ここに一人の怒りと悲しみのエグゼキューターが誕生しました。そっ首落とすくらいお手の物だ、遠慮せずにかかってこいや！

「ほら、あつち！ あつちの女子に注目してるよ、セージ！ 面白いもんが見れるぜ」

って、あれ。二人とも楓さんと昌良に注目してると思ったら、昌良の後ろに座ってる女性を見ていたみたいですね。

あの女性がいつたいたんだと言っ……、

「あつ、あつ、荒竹昌良！ 好きだあああー！ー！ー！ー！ー！ー！」
で、……しろう、か？

気のせい、ですかね。昌良の後ろに座ってた女性が突然立ち上がって大声で告白しました。その、楓さんとデート中の昌良に向って。

「紫藤ちゃん、今日も元気に素直にヒートってるね！」

あの、もはやカオスと化しているんですが一つだけ確認しておきたいことがあります。この話って、ラブコメでしたっけ？

「12」(後書き)

おかげ様で続きました。ランキング入り、ありがとうございます。
評価・メッセージ随時受付中。

「13」(前書き)

彼方善一：真理の事を「ダーリン」と呼ぶ以外は比較的まともな人です。その正体はグレングリーン。微妙に紳士で適度に変人。正直、対処に困ります。超困ります。

常田です。失恋しました。でも周りがそれどころじゃありません！

常田です。常田です……。常田です……………。

やるまいと思っただけでも自然とやっってしまう。流行っているからやるのではなく、やっってしまうから流行る。その事実は今気付きました。気付いたらやっっていた、って怖いですね。

僕のそんな心情もどく吹く風の周囲がムカつきます。超ムカつきます。いや、本当はそんな事どうでもいいんです。何が一番ムカつくって、楓さんとデートしながらいきなり別の女性に告白されて修羅場ってる昌良がムカつきます。

怒りのゲージは既に限界をふっ切っています。ここで一度落ち着きましょう。勢いに任せて物事を進めることほど愚かな事はありません。

まず一番の疑問は、あの女性の正体ですね。これは真理が善一さんに聞けば分かるでしょう。

次の疑問は昌良の態度です。先ほど、真理は紫藤さんと呼ばれる女性の行動を見て「今日も」と言いました。つまり、あの女性は今までにも昌良に対して告白をしたことがあったと推測できます。にも関わらず、昌良は楓さんに告白しています。ここで浮かび上がる疑問が一つ。昌良は彼女の告白に対してどのような返事をしているのか。もし楓さんに振られた時の保険として返事を曖昧にしていたとかだったならば……万死に値しますね。

「さて、お二人に聞きたいことがあります」

「うわっ、さつきより黒い顔つきしてる！ セージでナチュラル？ ナチュラルで黒いの？ ナチュラルボーンブラック？ って、うわあ。ゴメンナサイもうふざけませんから蹴らないで……！」

「自然体からの前蹴り。一見ただのケンカキックですが、関節で溜

めをつくって威力を増してますね。……やはり彼方流」

うん、無駄口はたたき終わりましたか？

「怖っ！？ いま心の声が聞こえたよ？」

「まあ、大体の予想は付きますが。いま昌良に向って告白している彼女、紫藤早紀さんについてですね？」

「話が早くて助かります」

紫藤早紀、ですか。聞き覚えはありませんが、一生忘れることのできない名前になる可能性が高いですね。ふふふ、楓さんの幸せを邪魔する輩は全て敵です。

「紫藤早紀。僕たちと同じ学校の1年生です。部活には入っていませんが、四月の体力テストでは全て平均以上の値を出しています。たしか期末試験では学年八位くらいだったかと。まさに文武両道ですね」

なぜそんな詳しいことまで知ってるんですか、善一さん。ストーリーの可能性が高いです。あなたはまだまだともな方だと思っていたのに残念です。

「彼女が昌良に告白するようになったのは夏休みに入ってからですね。詳しい理由は知りませんが、毎日のようにあぁやって告白してるみたいですよ」

なるほど。僕と昌良は一緒にいることが多かったのに、今まで紫藤さんを見たことがなかったわけです。夏休みに入ってからこういう関係が続いていたんですね、昌良の野郎。

これで情報収集は終わりました。それでは、狩りを始めましょう。

「って、常田くんどこに行くつもりなの！？」

「決まってるじゃないですか。ちよつとあの修羅場へと」

「修羅場って分かってて行くのか。……じゃ、なくて！ ここは通さないぜ！ 俺は昌良の親友だから。親友がやられそうになっくんのはむざむざ見過ごすなんてことはできない。ぶっちゃけるとあんな面白い状況を壊すなんてさせなんがっはっ！！」

沈黙は美德なりの言葉をあなたに送りましょう、向島真理。

それでは、呐喊！

「まあああー……さあー……よおー……いいいいー……！！」

倒れそうなくらい前のめりの体勢で道を駆けぬけます。

万有引力は推進力に。限界ギリギリのスピードを得た僕の身体を目標の五メートル前で宙に躍らせます。

「決まったー！！ 必殺のドロップキック！ いや、しかし些か距離が遠いかっ!?」

「いや、あれはただのドロップキックではありませんね」

善一さんの言葉通り、これはただのドロップキックではありません。空中で身を捻り、両腕を地面へ。そして思い切り地面を叩き、突進に回転力を加えます。

「やはり。あれこそ彼方流の妙技、門通し！ 僕は今、感動で奮えがとまりません」

「おお？ どうした常たぶっ……！！」

着弾を確認、華麗に着地。

もんどりをうって転がっていく昌良が滑稽です。超滑稽です。あ、自転車に轢かれた。

「ままま昌良っ！！ だ、大丈夫かあー……！！」

紫藤早紀さんとか言う人が昌良に向って走っていきました。あ、こけた。あ、昌良の顔面に直撃。

「い、痛いぞ昌良！」

うわあ。殴ってます。超殴ってます。え、マウントポジションじゃないですか。わあ、まだ殴りますか。それ以上殴ったら流石に昌良でも顔の輪郭が変わってしまいますよ？

あれ。あの人って、確か昌良のことが好きだったんじゃない……。

「紫藤ちゃんは素直っ娘な上に熱血だからね！。嫌な事があつたらすぐに手を出すよ！」

それは素直とは言いません。ただの犯罪者です。

「おいお前っ！ 私の昌良に向って何をするんだ！！」

あ、やっとな昌良を殴るのに飽きたみたいですね。早紀さんの両拳についている血液はこの際です、無視しましょう。

さて、少し話がややこしいので簡単に説明してあげますか。

まず突然の展開で頭がフリーズしている楓さんを指差します。その次に僕を睨んでいる紫藤早紀さんを指し、最後に昌良。

そして「二股未遂」とだけ告げます。

「なるほど。話は分かった！！」

「なんで今ので分かるんだよっ！」

妙なところでの確な突っ込みしますね、真理。

さて、いい加減話を進めますか。

「僕は常田政次と言います。単刀直入に聞きますが、あなたと昌良の関係は？」

「私の名前は紫藤早紀！ 荒竹昌良とは同じ学校の同級生だ！ い、今のところ昌良とはただの友人だ！」

うるさいです。超うるさいです。煩わしいとか鬱陶しいとかではなく、単純に声が大きすぎます。鼓膜がピンチです。エマーゼンシー、エマーゼンシー。

「夏休みの初日からかれこれ三十回以上昌良に告白しているけれど、すべて玉砕。……ってのは言わないんですか？」

そうですか。昌良の野郎、三十回以上も早紀さんを振ったと。ふふふ、ははははは。やっぱり僕の思っていた通りキープ用として……って、ハイ？

ギギギという擬音を立てて首を回します。実際にそついう音がなるわけじゃないのでそんな気がしただけです。

それはさておき。

「いま、何て言いました？」

「はい。だから早紀さんは何回も告白してますが、昌良は毎回律儀に断っています」

「わっ、わー！ー！？ いい、言うなこのヤロー！ お前がグレン

「13」(後書き)

グダグダ感が漂ってますが続きました。ランキング17位+閲覧者1000人突破ありがとうございます。評価・メッセージ随時受付中。

「14」(前書き)

紫藤早紀：僕や楓さんと同じ学校に通う女子生徒です。真理曰く、

「元気で素直でヒートな娘」。その正体はグレンブルー。熱いです。超熱いです。正直近寄りたくありません。

ピンチは突然やってくる。どうも、常田です。
ピンチ。

人は何を持って現状をピンチとみなすのでしょうか。
財布をなくしたとき？

旅先で迷子になったとき？

Yナンバーと事故ってしまったとき……？

いえいえ、そんなことではピンチといえません。他の人ならピンチかもしれません、正直他の人なんてどうでもいいので……。

さて、話を戻しましょう。

「さーて、政次くん。何でデートを台無しにしてくれたのか」

「昌良をボコボコにしてくれたのかああー！！」

「説明してもらおうかしら」

……ピンチです。

丸いテーブルに僕と楓さんと早紀さんが座っています。理由と経緯は察してください。

察せないという空気の読めない人の為に、偉い人の言葉を借りて説明してあげましょう。

曰く、『かくかくしかじか』。

ああ、昔の人はいい言葉を残してくれたものです。

「お前は話を聞いているのかあー！！」

やれやれ、いい加減現実逃避はやめますか。さすがに今日は逃げられそうに無いですし、早紀さんの拳が今にも飛んできそうなので。

っていつか、何でこの場に昌良が居ないのかが謎です。超謎です。この修羅場に相応しいのは昌良の奴だろうがっ！！

っと、いけないいけない。取り乱してしまいました。

ピンチはチャンス、ともいいます。楓さんも先さんも、とりあえ

ず僕の話の聞く気はあるみたいですね。話を聞いてくれる、それ即ち弁解する余地があるということですよ。

つたないながらも華麗なる話術を持って、見事この場を切り抜けて見せようじゃありませんか。

「あ、そーだ。政次くん、手出して」

「あ、はい」

メキヤ、……………と。僕の右腕から音が聞こえたのは気のせいでしょうか。

え、いや。まさか。問答無用ですか？

まさか、楓さんに限っていきなり骨砕いてくるなんて有り得ません、よ。

ね？

「とりあえず、誰が悪かったとか、誰に責任があるとか、そーゆーのの前にやるべき事はやっておかないとねー」

「あ、の。やるべき事って、コレですか？」

「うん。だって、理由はともかく、政次くんは昌良にドロップキックしたでしょ。だから、その報いね」

うーわー。昌良に告白されてから、楓さんって容赦無くなってきたなあ。

「そうだった！ 最低でも昌良が殴られた分はやり返さないと気がすまない！！」

今日も素直にヒートってますね、早紀さん。でもお忘れですか？ 昌良の怪我の9割は早紀さんが原因だ、ということよ。僕のドロップキックで地面に転がった後自転車に轢かれたのに、その怪我がわずか1割ですよ、1割。あの後どれだけ殴ったんですか、早紀さん。

まあ、大体そんな内容の事を反論として述べようと思っていたんですが。あー、もう手遅れですね。早紀さんってば、助走を終えて離陸してますよ。

それでは、これぞリングの美学とばかりにちよっくら少女のドロ

ツピキツクに耐えてきます。生きていたら後で会いましょう。
「つてわけでとりあえず1発目えええー！ー！！！」
「んー、もうちょっとテイクオフのタイミングを早めれば威力が増しまぶっ……！！！」

唐突に話は変わりますが、皆さんは格闘技ってどう思います？
僕は、あれほど安全な決闘は無いと思いますね。だって、危なくなれば審判が止めてくれるんですから。

ですが、こちらはたとえギブアップをしても相手が攻撃をやめるとは限りません。それでも一縷の希望を信じるのが人間ですよね。

だから、あえて僕は言います。

「ギ、ギブギブ。ドクターを呼んで下さい」

「おらあああー！ー、2発目えー！！！」

あ、駄目だこれ。本気で死んだかも。

「そこまでだ早紀！ いい加減やり過ぎだぞ！」

「オーケイ！ 紫藤ちゃんが今日も元気に素直でヒートなのはあい分かった！ だけど、俺とハニーのヴァーニン！ ラヴ！！ に勝てるかな！？」

「やだ、馬鹿……。そんな、皆の前でだなんて」

「はっはっは、普段は切れ味バツサリどころか血がブシャーッ、てくらいの突っ込みするのに今日はノツてくれるんだね。そんな所がスキッ！」

「あああ、僕はもう奴隷さ。そう、愛という名の……」

「……………」
「……………」
「……………」

以前の僕なら、たとえ骨は砕かれたとしても楓さんが手を握って

くれたことを一番喜んだと思います。

でも、今は。

楓さんに手を握られたことよりも、

早紀さんがドロップキックしてきた時に実はちょっぴりスカートの中が見えたことよりも、

昌良が被害者であるにも関わらず加害者である僕を助けるべく早紀さんの前に立ちふさがってくれたことよりも、

善一さんと真理がいつもの馬鹿な漫才しながらも必死で僕を運んでくれることよりも。

見知らぬ女の子が同情の眼差しで僕を見ながら頭を撫でてくれたことの方が嬉しいです。

さて、ところで善一さん、真理と一緒に走ってるこの女の子は誰なんでしょう。

……あー、なんていうか、大体オチは読めたなあ。

「14」(後書き)

かなりサボってましたが続きました。お待たせしてすみません。さて、二十歳になる前に後何話書けるのか……。評価・メッセージ随時受付中。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8295a/>

今日も今日とて戦闘員。

2010年10月12日18時55分発行